

## 要旨

近年、性的マイノリティの児童生徒の存在や健康問題、学校生活上の問題などが顕在化してきている。そこで、文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」という通知を出し、学校現場で性的マイノリティの児童生徒への配慮を求めている。すでに、当事者の実態調査や支援のあり方を探求した研究は行われている。しかし、性的マイノリティの児童生徒への対応を通して、養護教諭の認識がどのように変容するか、に着目した研究は見当たらない。

そこで本研究は、性的マイノリティの生徒に対応した経験がある養護教諭を対象に、その経験を通して性的マイノリティの生徒への対応に関わる認識がどのように変容したのか、そのプロセスと要因を明らかにする目的で行った。

本研究は、性的マイノリティの生徒への対応や支援経験があると認識する中学校と高等学校の養護教諭 11 名を対象とし、半構造化面接によりデータを得た。データ分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の手法を用いた。その結果、性的マイノリティの生徒への対応に関わる養護教諭の認識の変容のプロセスは、まず「**困惑する**」または「**普通と捉える**」ことから受け止め方から始まり、「**養護教諭自身の価値観が揺さぶられる**」経験が生じ、「**いち人間と教師の立場で葛藤**」、「**問題の本質を捉える中での揺れ動き**」、「**学校組織のしがらみ**」、「**性的マイノリティによる他の生徒への影響を危惧する**」の 4 つの揺れを経験しながら対応を進めていき、「**性的マイノリティの新たな認識の生まれ**」と「**学校組織の再構築に向けて歩みだす**」といった気づきを得る、【性的マイノリティへの対応の必要性を認識するプロセス】であることが明らかとなった。また、【養護教諭自身の経験】と【問題を顕在化させない認識】が、全体のプロセスである【性的マイノリティへの対応の必要性を認識するプロセス】に影響する要因であることが明らかとなった。

養護教諭にとり、学校組織は異性愛が前提となっている現状を認識し、セクシュアリティの意味や権利、現在の慣れた学校体制が本当に良いのかと自ら問い直すことが、性的マイノリティの理解やより良い対応への第一歩になることが示唆された。また、養護教諭自身の対応にあっては、学校組織全体で批判的ふり返りを行い、より良い対応を模索し続けることが、当事者が安心できる対応につながると考える。

**Key word :** 性的マイノリティ、養護教諭、セクシュアリティ、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ